
風の缶詰

沖川 英子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風の缶詰

【Zコード】

Z7829Z

【作者名】

沖川 英子

【あらすじ】

旅先の友人、小竹から届いた妙な缶詰。なんでも、旅先で不思議な男からもらつたというのだが…
ほのぼのとした話です。ちょっとファンタジー。

アルバイトでくたくたに疲れ切った僕がボロアパートのドアを開け、荷物を下ろして一息ついたのを見計らつたようにチャイムが鳴つた。たつた今閉めたばかりのドアを再び開けると、よく街中で見る緑の制服の男が立つていて、宅急便です、と元気に笑っている。氏名の確認と受領捺印を何とかこなし、僕は荷物を受け取つた。ありがとうございました、とこれまで元気に礼をして、彼は次なる宅配へと旅立つた。

手元に残された小包は異国の言葉が書かれた段ボール箱で、片手で持てるほどに軽い。振つてみるとカタカタ、と小さく音がし、中の物が揺れる手ごたえがある。表書きには東南アジアの国名が記されており、差出人の欄には明らかに日本人と分かる姓名がローマ字で記されていた。友人の小竹からだつた。あいつが僕に荷物をよこすなんて珍しい。明日は大雨が降るんじゃないかと思う。

とりあえず小包をリビング件寝室のテーブルに置くと、僕はひとまず一日の疲れを癒すべく、シャワーを浴びることにした。にやにやしながら頭を洗い、いつの間にか鼻歌をBGMに体を洗つていた。差出人が誰にせよ、ダイレクトメール以外の届け物は嬉しいものだ。風呂場を出て、僕はコンビニで買った弁当とビールを傍らに小包を開けた。ガムテープの簡素な梱包をはがし、ふたを開ける。中には手紙が一通、そして、現地の新聞で包まれた何やら丸い物が一つ。いそいそと新聞をはがす僕の顔は、きっとクリスマスの子供みたいだつたに違いない。実際それほどに僕は小竹のプレゼントに期待していた。だからそれが出てきたとき、僕は思わず

「何じやこりや」
と叫んでしまつた。

新聞紙を剥いた中から出てきたのは銀色の缶詰が一つ。
ラベルも何もついていない。ただプルトップがあるだけの無愛想

なシロモノだ。新手の嫌がらせなのか何なのか、いざれにせよ、中身の分からぬ缶詰なんて不気味以外の何物でもない。先ほどまでの高揚した気分はどこかに吹き飛び、僕は大きな落胆と少々の怒りを込めて小竹の手紙を開いた。相変わらずの癖字が躍る中、何枚あるか数えようと手紙をめぐると、最後の便箋に

『遠慮せずに開けてみてくれ』

という一文がひときわでかでかと書かれていて、僕はまたしても、「何じやこりや」

と呟いてしまった。ただし、今度はふん、と鼻を鳴らしながら。缶詰を開ける代わりに僕はジールをプシュッと開けた。ぐいぐいと数口飲んだ後、手紙の頭に目をやつた。

『よう、向原。相変わらず、自由人と書いてフリーター生活を満喫しているか。（うるさい、と僕は手紙にテコピングをした）知つての通り、俺はちょっと人生の休暇をもらつて旅に出ている。まあ、今まで突っ走ってきたし、蓄えもそこそこあるし、ちょっと寄り道したつて構わないだろう。気ままな旅の空というのも、結構いいもんだ。お前も暇なんだから旅行でもしてみればいいのに。（これは皮肉だつた。アルバイト暮らしの僕にそんな金はない。一瞬、小竹をぶん殴りに赤道付近まで行こうかと思った）さてさて、こいつで面白いものを見つけたのでお前に送ることにする。ひとまずのお土産だ。俺の数多い友人たちの中でも、こんなものに興味を示しそうなのは、お前くらいしかいないからな』

「おい、どういう意味だよ」

一本目の缶ビールを一口、僕は手紙に悪態をつく。疲れのせいか、結構酔いが早いようだ。このペースで開けていくのは少々まずいようと思つたが、それどころではなかつた。

こんなつまらない缶詰が僕へのお土産？ふざけている。

おまけに、手紙を読み進めるつゝに話がどんどん胡散臭くなつていぐ。

『これを手に入れたのはとある広場だ。歩き疲れてベンチに腰を下

ろしている時、隣に座つた男から手に入れた』

「お前は、そうやつてよくわかんない物をよくわかんない奴から貰うなよ」

手紙に言つたつて小竹に聞こえるわけがない。それでも僕は呟いてしまつた。

いいじやん、別に減るもんじやなし、増えてるし、とヘラヘラ笑う小竹の顔が見えた気がした。

あいつは目鼻立ちもくつきりしていて色が黒いから、さぞかし現地ではモテていることと思う。いつそ帰つてこなけりやいいのに。僕のそんな思いを余所に、小竹は謎の缶詰の入手詳細についてつらつらと書き綴つてゐる。僕は仕方なく手紙に目を通す。

『今思つとおかしな奴だつた。東南アジアなんて日茶苦茶暑いだろ?特にこの時期。それなのに、そいつは真つ黒なトレンチコートを着ていたんだ。裾から見える足元も黒い服、黒い靴と黒ずくめ。葬式みたいだ。だけど、俺は最初、変だなんて思わなかつた。隣に人が座つたなあ、つてくらい。それぐらい、普通に街に溶け込んでいたんだよ』

冷たい惣菜を口にしながら、そりやお前が鈍いだけだ、と呴く。大体、小竹は何事にも無頓着だし他人のことなど全く構わない。営業の癖に、十回会つた顧客の顔を忘れるくらいの加減な奴なのだ。

けれど悪態をつく一方で、その小竹が相手の服装について事細かに覚えているのが気になつた。そりや黒ずくめなのだから覚えていて当たり前かも知れないが、あいつが「トレンチコートを着ていた」なんてことを思い出すこと自体が奇跡に近い。それだけ、その人物は異様な風体だつたのだろう。そんな奴から貰つたものをこちらによこすな、と、改めて小竹をどつきたくなる。

けれども、話はさらに妙な方向へと進んでいた。僕はいつの間にかビールにも弁当にも手を着けず、一字一句を拾つように文面を追つていた。

『先に口を開いたのはそいつだ。『旅行ですか?』と、完璧な

日本語で話しかけてきた。俺は母語の響きが久しぶりで、嬉しくて、思わず「ええ」と返事をしてしまった。男は「そうですか、私もなんですよ」とこれまた滑らかに言つて、それからお互いに今まで行った国のお話をした。今思つと、そいつはネイティブな日本語を使つてたけど、どうも日本人には思えなかつたんだよな。かといってどこの人間かと言われても、そいつの顔立ちがどうにも思い出せない。覚えてるのはただ一つ、そいつが真つ黒い帽子を目深にかぶつていた、ということだけだ。だから顔の印象が無いのかもな。』

『ひとしきり話が終わつたところで、男が足元で何やらソーボーやりだした。見ると、そいつは茶色のトランクを持つていたんだ。ものすごく古くて年季の入つていてるやつ。あちこち旅したんだなつて、一眼でわかるような感じだ。けれど、ボロいっていうんじゃなくて、味のある、という言い方がぴつたりだつた。その味のあるトランクを開けて、彼は中身を取りだした。そして、「お近づきの印です。よろしければ」って、俺に差し出した。』

『俺は正直、やっぱり何かこいつヤバかつたんじやないかつて焦つたよ。だって、男が出したのは缶詰だつたんだ。何も書いてない無地の銀色、それも二つ！そんなものを渡されたつて、ちょっと困るだろ？』

「うん、僕、今すぐ困つてるよ」

『返そつかと思つたんだけど、そいつ、ほんと「イイヤツ」オーラが出てたんだよ。というか、紳士つて感じだつたんだよ。俺、紳士つて見たことないけど。だから、何も聞かずに突つ返すわけにはいかなかつた。仕方ないから、取りあえず「これは何ですか？」と訊いてみた。そいつは穏やかな口調で、「風の缶詰ですよ」と答えた。

『

風の缶詰。

僕は銀色の缶を見た。そして、ははあ、と呟いた。小竹も同じ答えに至つたよつて、手紙には僕が今思つたのと同じことが書いてあつた。

『あ、なるほどねと思った。お前も聞いたことあるだろ? 「空気の缶詰」って土産物。「ナントカ高原の空気」だとか書いてあって、その土地の空気を詰めましたっていうやつ。空気なんてどこでもいつしょなんだから、一種のジョークだよな。昔流行つたらしいそのお土産を、男はどうも売つていたらしいんだよ。で、それを俺にくれるつてわけ。「私は、旅した土地の風をこの缶に入れて集め、様々な方にお分けしているのです」だつて。面白いからありがたく貰うことにしてたんだけど、「どこの空気ですか?」って聞いたら、「開けてみればわかります」だつて。じついうのつて、開けずに楽しむ物だよな? 变なの、とは思つたけど、まあいい、リュックにしまつて、俺はお礼にそいつにメシをおじつてやつた。さすが紳士、きれいな食べ方だつたよ』

ここまでならば、多少不思議ではあるがあり得ない話ではない。僕はそういうことが、と少し安心し、小竹も変な奴だよなと笑つた。ムカついて悪かつたな、という気分になり、便箋をめくつた。

『そいつと別れて宿に戻つてから、俺はこの缶詰をどうしようか迷つた。本当なら「どこの空気だつてよ」なんて言つて楽しむものなんだろうけど、何せ、ラベルがない。どこの物か手がかりが何もない。それじゃあ、单なる缶詰だもんな。わけが分からぬ。おまけに同室の奴（オーストラリア人、名前は忘れた）が「面白そうだから開けてみろ」って煽るもんだからさ。まあ、一つあるしいいやつて一個開けてみたんだ』

ここから、小竹の手紙は訳がわからなくなつた。何が起こつたのか報告するのが旅先からの手紙であるとすれば、完全に失格である。何せ小竹は肝心の結末をぼかしてしまつているのだ。

『俺たちはびっくりしたよ。でも、とても素敵だつた。いやほんと、俺が「素敵」なんて気持ち悪いと思うかもしれないが、それ以外に言葉が無かつたんだ。同室の奴は「こりや魔法だ」なんて呟いていたし、俺もそう思った。あのミスター・黒ずくめは魔法使いだつたんじゃないかなって。こんな素晴らしい物、誰にあげようかと本

氣で悩んだが、やっぱこれはお前が一番素直に喜んでくれるんじゃ
ないかと思い、送ることにした。まあ、遠慮せずに開けてみてくれ。
きっととびきりの氣分になれるはずだ。俺が保証する。じゃあな。』

終わり、である。

僕はぽかんとして、じばらく小竹の悪筆を眺めていた。

まったくもって意味が分からぬ。この「風の缶詰」とやらが魔
法を見せるつて？ そんな馬鹿な。

一瞬、この中には新手の麻薬か何かが入つていて、小竹と同室
のオーストラリア人は一人してトリップしてしまつたのではないか
と思った。開けて嗅ぐだけでいい新種のクスリ。黒ずくめの男は売
人かもしない。けれど、小竹はそんなことをする奴じやないなと、
ふと僕は我に返つた。彼はちゃらんぽらんでいい加減だが、法に触
れることは許せないたちだ。たとえ海外にいても違法なことをする
わけがないし、ましてやそれを僕に勧めるわけがない。

僕は缶詰を手にとつて、まじまじと見た。冷たく銀色に光るだけ
で、「風の缶詰」は何の手がかりもくれない。振つてみても、何の
音もしない。

うーんと唸つて少しためらつ。でも決断するまでに長くはかかる
なかつた。

僕は思い切つてフルトップに指をかけた。

プシュッと缶詰が鳴つた。

思わず顔をそむけて数秒固まり、僕は、そろそろと手の中の缶詰
を見た。

何も起こらない。

爆発するわけでもなければ消えるでもない。

缶詰は缶詰のまま、ただテーブルの上にちょこんと乗り、僕に抑
え込まれている。

小竹の奴にからかわれたのだ。

僕はほつとしたような裏切られたような、複雑な気分で缶から手を離した。やれやれ、とため息をついて小竹の手紙を封筒に戻し、段ボールごと部屋の端に寄せて椅子に座りなおす。夕飯の続きを食べようと箸を取った。

どこからか、甘い匂いがした。

これは、花の香だ。南国特有のむせかえるような芳醇な香り。うつとりと夢心地の匂い。

ふつと皿をつぶつた僕の頬を、雨の予感をはらんだ湿潤な風がなでる。

風？

僕はベランダを見る。窓は閉まっている。クーラーは付けてない。扇風機は手紙を読んでいる最中に邪魔だから消した。

それなのに、風？

僕は缶詰を見た。そして恐る恐る開け口に手をやつた。

ふつと指先に、吐息のような空気の流れを感じた。

僕は思わず缶詰を手に取り、開口部をまじまじと見た。プルトップを上げたわずかな隙間から甘い匂いがする。そして、何かさわさわと弾けるような音。

今度はためらわなかつた。プルトップに指をかけ、僕は一気にふたを剥がした。

ざん、と大きな音がして、気がつくと僕の目の前には真っ青な光景が広がっていた。

鳥たちがみやあみやあと鳴き交わし、ぴかぴかの青空の中を飛び交っている。爆発したような陽の光。思わず手で庇を作る。足元には柔らかく暖かな白砂。振り返れば少し離れたところに防風林があり、色とりどりの花が咲いている。

ざん、ざあん、と寄せては返す音。

目の前には、世界中のありとあらゆる青を集めたような、海。

僕は浜辺にいた。誰もいない、僕だけの海を見つめていた。

風は暖かく湿って優しかった。

空はどこまでも青く、遙か遠くで種類の違う青と混ざっていた。樂園に僕はただ一人座り込んで、甘い匂いに胸を満たされながらいつまでも海を見つめていた。

気がつくと、僕は缶詰を手に一人部屋の中に座り込んでいた。はつとして慌てて手の中をのぞく。けれど、缶詰からはもう甘い香りも暖かな風も出てこない。役目は終わったようで、「風の缶詰」はただの銀色の金属と化し、僕の手の中で鈍く光るだけだった。

ただの不燃「」となつた「風の缶詰」だったが、僕は捨てるに捨てられず取つておいでいる。たまに嫌なことがあると、それを手に取つて、あのどこかにある樂園を思い浮かべる。そう、僕は、あれはこの地球上に必ずある光景だと思っている。だって、小竹の会つたミスター・黒ずくめは言つていた。「旅した土地の風を缶に入れている」って。

だから僕が見た風景は、あの風は、どこかに存在しているんだ。そう思つと、僕は何だかふつと気持ちが柔らかになる。僕がこうしていらいらしたり、どうしようもなく心が重くなつていたとしても、この世界のどこかには夢のよくな風景が広がつていて。それを僕は知つている。

それだけで、なぜだか嬉しくなる。

帰つて来た小竹も同じこと言つてたな。あいつのは、遠い北の海だつたつて。生命に溢れた豊かな海中で、小竹はクジラの鳴き声を聞いたつて。それからは、何かあるとその風景を思い出すんだつて。

さて、これでこの贈り物の見当がついたどうつ? 気持ち悪い缶、なんて怒らせていたらごめん。

僕が誰から貰つたか、もつ分かつてゐるよね。確かに、小竹の言つ通り真つ黒な人だつたよ。顔立ちは僕も思い出せない。記憶力には

自信があるんだけどね。

この中にはどここの風が入っているんだひつね？中は開けてのお楽しみだ。

けれど、きっと君は開けて良かつたって思うよ。それは僕が保証します。

それでは、よい旅を。

(後書き)

数年前に中編として書いた作品のスピンオフのようなものです。ちなみに、その作品は公のコンクールに出して、あつさり落選。しかしながら、人生初、完結できた作品なので思い入れはあります。た。
懐かしい思い出です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7829n/>

風の缶詰

2011年5月17日06時38分発行